



ほうりゅう しゅびょう み 放流したアユ種 苗を見つける

アユは秋に川の砂礫底で産卵し、孵化した仔魚は流れに乗って海へと流下します。そして、冬の間は海で成長し、春になると稚魚になって川へ戻ってきます。神奈川県内の河川では、3～5月頃にアユが遡上し、そこで成長して解禁後の釣り資源となります。しかし、海での生存率や河川環境の影響などにより、アユの遡上量は極端に変動することがあります。

そのため漁協ではアユ釣り資源のため、人工的に育てたアユ種 苗をほうりゅう放流しています。

この人工アユ種 苗が生き残っているかは気になります。しかし、春になると相模湾から天然の海産アユが大量に遡上するため、釣れたアユをひとめみただけでは、天然種 苗か人工種 苗かを見分けることは困難です。そこで、ほうりゅうまえひょうしき放流前に標識をつけることで識別を可能にしています。

ひょうしき標識にはさまざまな種類がありますが、さかなふか魚に負荷をかけすぎないことが重要です。また、さかなへダメージをきよくしよくく極力少なくすることも求められます。アユにはせこうほう背びれの後方に「アブラビレ」という小さなヒレがあります(写真1)。このヒレはななかまサケ・マスの仲間の特徴的なもので、きと

ると再生しません。諸説ありますが、遊泳や生存に影響を与えないことから、アブラビレを切除する方法が標識法として一般的に用いられています。

アブラビレを切除する作業は、人工種苗にストレスをかけず効率的に作業を進める必要があるため、麻酔をかけておとなしくなった状態でハサミを使って切除します（写真2、3）。この作業には時間がかかり、また放流試験では1,000尾以上のまとまった量を放流しないと標識したアユを発見できない可能性があるため、漁協や関係団体と協力して標識付け作業を行います（写真4）。

このような標識をつけることで、人工種苗の移動状況やアユ釣り資源への貢献度を確認することができます。これらのデータを集積することで、今後の放流計画に役立てる資料として活用していきます。

ないすいめんしけんじょう しゅにんけんきゅういん やまだ あつし
内水面試験場 主任研究員 山田 敦



しゃしん やじるし
写真1 アユ(矢印がアブラビレ)



しゃしん さぎょうふうけい
写真2 アブラビレカット作業風景



しゃしん ず やじるし
写真3 カット済み(矢印がカットされたアブラビレ)



しゃしん さぎょうぜんけい
写真4 ヒレカット作業全景